JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	近代漆器　三都物語　－山中・会津・海南－
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ３，34
Issue Date	2010-02
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/8842
Rights	
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

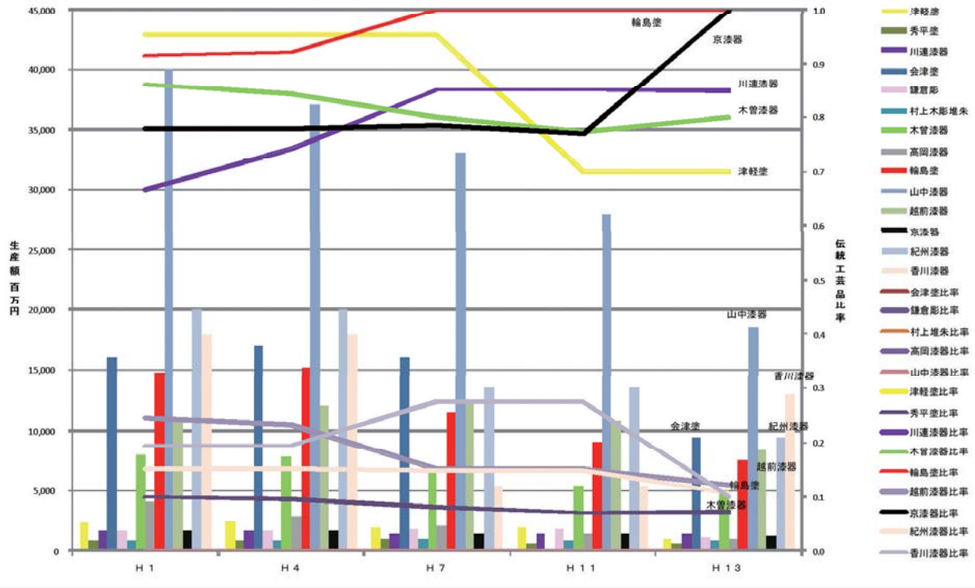
Japan Advanced Institute of Science and Technology

3 今後の展望

近代漆器の出現により、漆器における郷土性というものが見えにくくなっています。そのような時代の潮流のなかで、頑なに木製漆器にこだわって郷土性を保持しようと現在に至っている産地もあります。山中漆器連合協同組合の宮理事長は、山中産地の今後について次のように言及されております。「昔から漆器は贈り物、お返し物として使用されてきました。その理由としては、漆器は非常に高級なイメージ、価格がわかりにくいところもあって、先様によいものを頂いたという満足感を与えるというところで、需要がありました。今後もそのようなお客様の期待に応えられる商品を作っていくのと同時に、実需品、今は弁当箱が売れていますが、そういった市場にも入っていかなければならない。電子レンジにも対応できるプラスチック樹脂（ペット樹脂）のおかげで弁当箱の使い方そのものが変わってきた現代において、うまく対応できたわけです。現代の日本人の生活スタイルにあった商品、そういうものを手掛けていくことが必要です。」時代の波に飲み込まれて消滅しないよう、それぞれの産地が特色を出していくことが求められています。

山中漆器連合協同組合
宮　宏之　理事長

漆器産地生産高、伝統工芸品比率推移



出所：各年度の全国伝統的工芸品総覧（伝統的工芸品産業振興協会）より作成

JAIST 社会イノベーション・シリーズ 3

発　行　2010年2月

発行所　国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・地域・イノベーション研究センター
〒923-1292　石川県能美市旭台 1-1　知識科学研究科棟 II 7 階

■本誌に関するご意見、お問い合わせ
TEL：0761-51-1839　FAX：0761-51-1767　E-mail：dento-secr@jaist.ac.jp

本誌は、文部科学省科学技術振興調整費地域再生人材創出拠点の形成プログラムの助成を得て発行しております。

JAIST
JAPAN ADVANCED INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY 1990
北陸先端科学技術大学院大学

JAIST SOCIAL INNOVATION SERIES
社会イノベーション・シリーズ 3

近代漆器 三都物語
― 山中・会津・海南 ―

漆器素地は昭和 30 年頃までは、木製というのが一般的でした。ところが石油化学技術の発展により、次第に化学塗料などを塗布したプラスチック素地の漆器（本稿ではこれを「近代漆器」と呼ぶ）が大量に普及するようになりました。他産地に先駆けて近代漆器生産をリードしたのが、山中、会津、海南の漆器産地でした。突出した生産高を実現していった山中産地を中心に、これらの 3 産地が新しい技術を取り込んでいった経過をご紹介いたします。

No.34

THE THREE CAPITAL STORIES

1 近代漆器の出現

利潤はどこから得られるか。“遠隔地”と重商主義者は答えたであろう。“労働者階級”と古典派経済学者やマルクスは答えたであろう。そして、もはや搾取すべき遠隔地も労働者階級も失いつつある現代においては、内在的に差異を“創造（イノベーション）”するよりほかはない（岩井克人 1992「ヴェニスの商人の資本論」）。漆器産業においても同様なことがいえるかもしれません。第 2 次世界大戦後、石油化学技術の進歩に伴って昭和 30 年代に入るとプラスチックを素地とした漆器が量産化されます。はげない、容易に破損しない、狂い歪みを生じない、一定品質の製品を短期間に大量に安価に作ることができる近代漆器は、まさに漆器産業におけるイノベーションであったのです。

2 山中、会津、海南産地の諸相

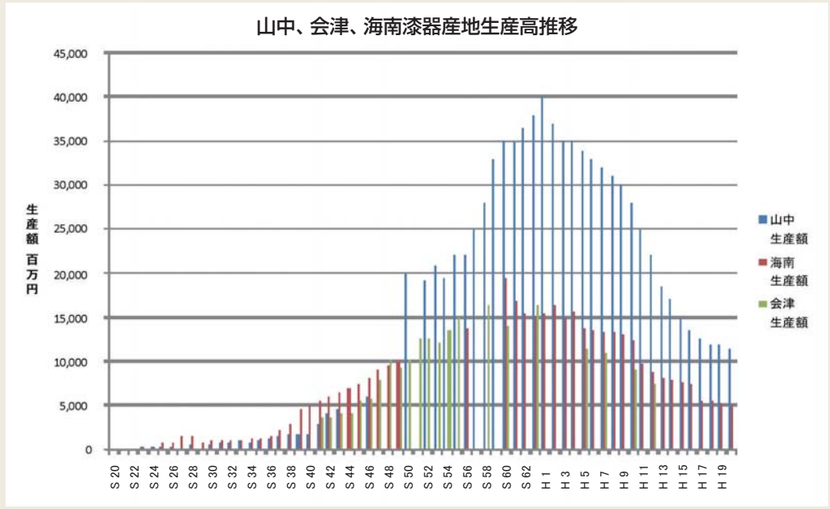
ほぼ同時期に近代漆器と取り入れた山中、会津、海南の各産地でしたが、生産高推移グラフをみると、昭和 50 年前後から次第に山中の生産額が突出していきます。他産地に先駆けて近代漆器に移行した主な要因として、折からの中国との国交断絶（昭和 33 年、34 年）による漆不足もあったのですが、山中、会津、海南に共通する以下の要因もありました。

1. 手間のかからない技術による、コスト重視、大量生産、大量販売を得意とする産地
2. 問屋、漆器商人主導（市場指向の合理的判断）
3. 温泉観光地、工業地帯に位置し、人の交流を通じての最新情報の入手が可能

そして、会津は“口物（お椀・重箱）”、海南は“盆”といった木製漆器時代に得意であったものを引き続き近代漆器として手掛けて、戦後の需要に応えて順調に生産高を伸ばしていきました。これに対して、山中は他の 2 産地に比べて際立って主力となる商品はありませんでしたが、やはり従来の木製漆器の時代の延長として、菓子鉢、銘々皿、お椀、盆などを中心に近代漆器として手掛けていきました。

やがて、昭和 40 年代後半よりプラスチック成型技術において新たなイノベーションが起こります。それは、従来のプラスチック材料としての熱硬化性樹脂（フェノール樹脂、ユリア樹脂、メラミン樹脂など）から、熱可塑性樹脂（主に ABS 樹脂）へ、そしてそれら材料の変化に伴っての直圧式からインジェクション方式への成型機の変化です。熱可塑性樹脂、インジェクション方式の成型は、従来の熱硬化性樹脂の直圧式成型に比べると、より精度が高く複雑な構造の製品を生産でき、また生産性も高く品質、コスト面で前者に比べ優位な生産技術が得られます。しかしながら、直圧式成型機に比べインジェクション方式の成型機は高価であり、設備を入れ替えるには大きな負担となります。実際、従来製品のお椀、重箱、お盆を生産するうえでは、既存の直圧式成型機で充分であったので、会津、海南はこの新しい成型技術に後れを取ったようです。ところが、山中産地には得意とする製品がなかったことが幸いし多品種のものを安価に大量に作るのに有利な ABS 樹脂、インジェクション成型機の導入・利用が比較的早く進みました。このことが技術面において山中産地が会津、海南産地に比べ品質・コスト面で優位に立った一つの要因となったと考えられます。

そのうえ、山中産地はこの新技術をベースに他産地にはみることができない社会イノベーションともいうべきライバルの問屋間の協働により、特にブライダル・ギフト市場に特化した電話台、時計、ハンドクリーナー、ライト（灯り）類など、異業種、異素材との組み合わせによる製品を続々と開発し、飛躍的に生産高を伸ばしていったのです。



出所：各産地の組合、県の資料他より作成

	山中産地	会津産地	海南産地
所在地	石川県加賀市	福島県会津若松市	和歌山県海南市（旧黒江町）
起源	天正年間（1573-92）越前の山間に居住していた木地師たちが山中町の南東、大聖寺川の上流、真砂に良材を求めて移住しての、ろくろ挽きが始まりというのが通説。	室町時代（1338-1573）芦名氏の領主時代に椀類とその他の漆器を生産。これらの挽物は会津地方の山中に深く隠れた平家の落人によって製作されたと伝えられている。	室町戦国期、近江系木地師による庶民漆器産地発生の時流の中で、遅くとも戦国末期（1550 年～）には、渋地椀を作る村里となったと推測される。
漆器の特徴（木製漆器）	挽物を主とし、下地は従来はほとんど渋下地であったが、昭和年間にカゼイン下地に切り替えて堅牢、かつ能率を増進した。上塗は花塗で溜塗に優れ、また黒艶消塗を得意とする。加飾は一般的には消粉蒔絵で、友治（ゆうじ）あげと称し絵漆で文様を描き、下蒔用の焼錫粉を蒔き、続いて本朱を蒔き締めて光沢を出し金消粉を蒔く。この他に千筋または糸目挽きと称して特殊なノミを使用して均等な筋目をつけ摺漆仕上げしたものは他の模倣を許さない独特なものである。	素地丸物は椀類を主とし、板物素地は膳、盆、二段重、菓子器、硯箱などが多い。塗はほとんど渋下地で、上塗りは洗練された美麗の花塗りである。特産朱塗の木杯に至っては、漆下地で独特の発達を遂げ熟練の技術は他の模倣を許さない。蒔絵は消粉蒔絵、平極蒔絵、丸粉蒔絵の三種に自然と分かれ専門的に発達し、特に伝統を誇る消粉蒔絵及び金地は独特で他の模範となり、会津漆器の大なる特徴である。平極蒔絵も明治年間に伝習以来、色粉を併用し新しい作風を起こした。	髹漆法は極めて簡易なのでコストは益々低廉となり、他の競争を許さない。檜材の供給が贅沢で廉値なのでほとんど膳、盆類、重箱などの板物で挽物類は僅少である。丸盆、茶櫃などの素地は檜材の曲物で極めて低廉である。下地法は一般的には概ね半田地、すなわち膠（にかわ）下地である。膠下地の取り扱い法と付着法の技術は他の追随を許さない驚くべき熟練さである。塗はほとんど伝統的に高い技術力をもつ花塗で、蠟色塗は少ない。
産地構造	問屋制（漆器屋商人）	問屋制	問屋・塗師屋制
主要製品	菓子鉢、銘々皿、お椀、盆、茶櫃、棗（なつめ）、他	お椀、重箱、菓子器、硯箱、他	お盆、膳、重箱、他
主要市場	百貨店、量販店、一般小売店を通じての都市市場	百貨店、量販店、一般小売店を通じての都市市場	百貨店、量販店、一般小売店を通じての都市市場

出所：沢口悟一（1966）「日本漆工の研究」、他を参考に作成